

家庭

蠅の中で働く＝カンボジアで



2000年11月、カンボジアの首都プノンペンスタメンチャイ地区に入る。

その日は一日中、厚い灰色の雲に覆われていた。夕暮れが近くなり、雲のすき間からオレンジ色の太陽が顔をのぞかせる。

ごみ山のとっぺんでひと休み。露出計で光の強さを計ってみる。もう、撮影は無理な明るさだ。私の一日は、これで終わり。しかし、ここで働いている人たちはまだ、汗を流している。

私の横に、10代半ばの男の子が2人、しゃがみ込んでいた。「名前は何ていうの?」「ケムシェ」。大きい方の男の子が答えた。クメール



ライトつけ、夜11時まで労働

宇田 有三

語ができない私には、それ以上の会話は難しい。

5歳くらいの女の子がご飯の入った容器を運んできて、3人で仲

良く夕食を食べ始める。小さなスプーンに白いご飯と青い野菜のスープをのせ、口に運ぶ。

「おいしいん?」。私の関西弁を聞いて、3人が顔を寄せ合ってクスクス笑う。ブンブン飛び回っている蠅(はえ)が、ご飯やスープの容器、体中にまとわりつく。

辺りは完全に暗くなり、ちょっと離れた人の表情は見えなくなった。ライトをつけたブルドーザーがうなり声をあげ続ける。

「いつまで働くの?」。身ぶり手ぶりでケムシェ君に尋ねる。「夜11時まで」

何かの間違いではないかと思って、何度も確認した。夜11時といえど、私はベッドの上に転がっている時間だ。

ご飯を食べ終わったケムシェ君の頭には、ライトがしっかりと取り付けられていた。

(フォトジャーナリスト)